

留学先大学： School of Oriental and African Studies (SOAS), University of London
留学先での所属学部・研究科： _____
留学先での在籍身分： Japanese Exchange Student
留学期間： 2010 年 8 月～ 2011 年 2 月
神戸大学での所属学部・研究科： 法学部
学年（出発時）： 3 年次
本報告書記入日： 2011 年 8 月 2 日

授業について

留学中に履修した授業について記入してください。

No.	コース名	教授名	時間数 ／週	留学先 での単 位数	履修し ている 学生数	予習，復習，テスト等についてアドバイスも含 めて教えてください。
1	In-sessional Grammar Improvement Course	Robin Kearney	2	1		課題や試験などは特になし。履修に関しては担当者と要相談。条件や人数によつては受講できないこともある。Grammarの他にwriting, listening, presentation, discussionなど自分の苦手な部分に合わせてコースを選ぶことができる。
2	Development Conditions and Experience	Dr. Anna Lindley	3	1		Development studiesを勉強する一年生向けの、開発に関する理論などを学ぶ授業。入門科目とはいえず、一内の授業でかなり多くの内容を詰め込んであるので、リーディングなどをしっかりとこなしていけないと何も分からないままになってしまう。毎回ムービース形式で講義があるのでアクセントに慣れるのが難しい。試験は過去問を参考にそれぞれのテーマについて重要なポイントをまとめておくことは必須。
3	Introduction to Global Forced Migration Studies	Dr. David Rampton	3	1		3年生以上の学生向けの授業で、マスターの学生も受講している。世界の、移民・難民問題について学び、考える授業。リーディングの量が非常に多い。
4	The Anthropology of Gender	Dr. Caroline Osella	3	0 . 5		二学期から半期だけ開講されるSOASでも数少ないジェンダーの授業。日本でもあまりこのテーマをメインに据えて学ぶ機会はないので、とても興味深かった。学生も多様。
5	Special Course in Chinese I	Dr. Song Lianyi	4	1		語学以外をメインに学習している学生向けの中国語の特別コース。マスターの学生も多い。講義で主に文法などを学び、チュートリアルでオーラルを学ぶ。一週間で進む進度が早いので、自分でしっかり予習・復習しなければならない。中間テストが二回、期末テストが一回ある。宿題も毎週出る。
6						
7						
8						
9						
10						

授業（カリキュラム等）のクラスのサイズ，成績評価，現地学生の取り組み等

授業は大抵の場合において、二時間のレクチャーと一時間のチュートリアル（10人前後の少人数学習集団で、その週のテーマのレクチャーやリーディング課題から、疑問に思ったことや、取り上げられている問題についてディスカッションやプレゼンテーションを行う）から構成されている。クラスのサイズは、授業によって様々であるが、私が履修していた科目では、レクチャーは大体30人～60人、チュートリアルは10人前後であった。成績評価については、チュートリアルへの出席状況、コースワーク（エッセイ）が1～3本と、期末試験で評価される場合が殆どであるが、期末試験の出来が評価に占める割合が大きい科目が多い。普段の学習の大半を占めるのが、毎週大量に課されるリーディング課題である。課題といっても、長いリーディングリストが渡されるだけなので、自分で図書館に行って本や論文を入手して、「自分で読むもの」であり、レクチャーはむしろリーディングの補助のような位置づけである。従って、このリーディングをこなさない限りはレクチャーに出席してもさっぱり、であるし、チュートリアルはそもそもリーディングをしっかりとやってきていることが前提なので、ディスカッションに参加することができない。中には、クラスメイトと手分けしてリストをこなしている学生も居る。チュートリアルでは毎週担当の学生がその週のテーマについてレクチャーやリーディングからポイントや問題点をまとめたプレゼンテーションを行う。学生は、勉強するときに遊ぶときの切り替えがとてもしっかりしていると感じる。教室や図書館で居眠りしている学生は一人も居ない。平日はしっかり勉強して、金曜日の夜から週末は思いっきり羽を伸ばす、といった風である。その理由の一つに、学生たちの1日の意識がはっきりしていることが挙げられると思う。なんとなく大学に来ているというのではなく、これを勉強したいから、これに興味があるから、将来こんなことがしたいから、と興味や目的をはっきり持っている学生が多い。

費用について

留学期間を通して必要だった費用を記入してください。（概算で結構ですので、円価で記入してください。）

・航空運賃： 往路96,000円 復路（イタリアより）：72,000円
・住居費：（月額） 68,900円 ×（留学月数） 10 ヶ月 = 689,000円
・食費：（月額） 10,000円 ×（留学月数） 10 ヶ月 = 100,000円
・保険料： 97,000円
・その他： 教科書代 20,000円
合計： _____（留学期間全体の費用）

その他 自由に記入してください。（800字〜）

“人種のつぼ”とも呼ばれるように国際色豊かで、また新旧が混在し、刺激に満ちた大都市ロンドンで、アジア・アフリカ研究に大変権威があり、世界中から様々な学生が集まるSOASという大学に通いながら過ごした1年は、私の人生において大変大きな意味をもつものであった。

海外経験が殆ど無かった私にとっては、まず「生活すること」が初めての第一歩であった。始めは信号の渡り方も分からず、プリティッシュ・イングリッシュは少しも聞き取れず、スーパーで買い物するのも一苦労であった。銀行開設という関門を乗り越えて、私は少しずつ初めてのロンドンでの初めての一人暮らしに慣れていった。pre-sessional english courseを受講したことは、大学開始に向けて英語の土積みをすることに加えて、本格的に勉強が始まる前にロンドンの生活に自分を慣らす、という面においても良かったと思う。とはいっても、この英語準備コースも決して楽なものではない。始めの週からいきなり毎週エッセイを提出しなければならないし、プレゼンやディスカッションも毎週課題が出る。このコースで出会った修士課程の友人とは、コース終了後も一緒にでかけたりご飯を食べたりと親交を深め、今でも連絡を取り合うかけがえの無い親友になった。

二月の英語準備コースはあっという間に終わり、いよいよ本格的に大学がスタートすると、また驚きと苦労の連続であった。学生は履修登録に際して、受講したい授業の担当教授に会いに行き、受講してもよい、という承認のサインをもらって各学部のオフィスに提出しなければならない。この履修登録が、私にとってはまた非常に勇気と苦労を伴うものであった。オフィスをたらい回しにされ、学校中を奔走することもしょっちゅうであった。私はin-sessionalの英語のコースの他に4つの授業を受講していた。開発学の一年生向けの授業・移民難民問題に関する授業・ジェンダーの授業・中国語である。

なかでも最も重点を置いて受講したのは、Development Conditions and Experiences という開発の授業である。一年生向けのコースで、開発における様々な理論や現状などをとに、開発の“考え方”を勉強する。毎週違うトピックや論説が設定されており、理論や国々の発展してきた条件や経験を元に、従来の経済発展の方法では解決できない発展途上国における問題、格差や貧困、「開発」とはなにをかを考える。また、開発学におけるオーソドックスな考え方と同時にオルタナティブな考え方も学ぶ。SOAS独特な（主流に対してやや批判的な）開発学の考え方も勉強できるという点で、様々な角度から物事を見る柔軟な思考力を養う機会になった。私は今まで開発に興味はあったものの学問として勉強したことがなかったので、開発を基礎から学んだとともに、今までの開発に対する安直な見方を覆されるものであった。また、開発の問題を理論だけでなく現実と比較しながら考えられるようになった。またジェンダーのAnthropology of Gender Studies という授業では、日本ではなかなか直接学ぶ機会が少ないテーマで、“性別とはなにか”“女は自然で男は文化か”“同性愛者”身体とジェンダー”など、当たり前と思っていたことを覆し、目から鱗の落ちるような非常に新鮮で興味深い学びであった。

授業が始まると、覚悟はしていたもののSOASの授業のあり方と日本のそれとの違いに驚いた。日本の大学ではなんとなく講義に出てテスト前になればノートや教科書をまとめ直せばなんとか単位がとれてしまう授業も少なくないが、SOASではそうはいかない。毎回大量のリーディングが課され、それをなんとかこなしていかなければ講義に出てもんぶんかんぶん、チュートリアルにはまるで参加できない。毎日図書館が閉館する夜11時半まで図書館に閉じこもり、ひたすらリーディングをこなした。専門書には専門用語や論文に独特の表現がたくさんあり、書いてあることもいって専門的な内容なので、一つの論文を読むのに数時間を費やさなければならず、毎日図書館にこもっても、リーディングリストの半分もこなせなかった。講義に出ても、教授の話は半分くらいしか聞き取れず、よく分からないまま授業が終わってしまいうこともしょっちゅうであった。さらに理解を深めるディスカッションの場であるチュートリアルも、始めはとても苦痛だった。他の学生が何を話しているのか聞き取るのが精一杯で、質問できることにもおびえていた。努力しても、いっこうに理解が深まらず、ことごとく自信を失い、焦りと苛立ちがつのるばかりであったが、辛抱強くSOASでの勉強に自分を慣らしていった。

一学期の終わりに開発学の授業で初めてのコースワーク、3000語のエッセイを書いた。提出の二ヶ月前から図書館で資料を山ほど借りてきて、かたっぱしから読み漁り、最後の一週間はほとんど寝る間も惜しんでエッセイを書いた。最後にイギリス人の友人にグループリーディング（添削）をしてもらって、エッセイを提出したときの達成感はとても大きかった。しかも、そのエッセイが他のネイティブの学生に勝るとも劣らない成績がつけられて返ってきたことで、私は少し自信を取り戻し、最後まで諦めずに頑張ろうと思うことができた。半年が経った頃からやっと、少しずつ講義が聞き取れるようになり、リーディングを効率的にこなす要領も身につく、チュートリアルでもぼつりつりとはあるが発言できるようになっていった。チュートリアルでの、自分の英語で通じるのか不安でいっぱいだった15分間のプレゼンテーションも、分かりやすかったよ、とクラスメイトが褒めてくれた。

3学期はテスト学期で、二期ですべての授業は終了するため、二学期の終わりになると、あらゆる授業からコースワークが課され、エッセイの提出が集中する。そのなかに、移民・難民問題に関する授業の5000語のエッセイがあった。私は提出期限の二ヶ月以上前から資料を集め、リーディングを始めていたのだが、情報を集め、書きたいことが増えるに従って、一体それらの情報をどうやって5000語で構成し、まとめてよいのか途方に暮れてしまい、膨大な量のノートと資料を前に何も書き進められない日々が続いた。そしてそんな時期にひどく体調をくずし、結局私はそのエッセイを書き上げることができず、結果的にその授業の試験も受けることができなかった。自分の力不足・努力不足を改めて痛感した出来事であった。

開発学の授業の試験にだけはなんとか通ろうと、エッセイを二つ提出し、試験準備にあたってはノートとリーディングをすべて整理し直し、過去問を参考に自分で回答を作ったりして試験に挑んだ。SOASの試験はとても厳格に行われ、緊張して頭が真っ白になったらどうしよう、ととても不安だったが、なんとか時間内に回答を仕上げ、合格点をもらうことができた。SOASの学生は本当に切り替えがはきりしていて、勉強熱心であった。週末はババで飲み騒ぎ、平日は図書館で夜まで勉強する。授業で居眠りする学生なんて一人も居ない。授業でもチュートリアルでも積極的に質問し、学生同士で勉強グループを作り、ディスカッションする。皆なんとなく大学に通う、というのではなくははっきりとした興味や目的を持っているので、学びに対するモチベーションが大変高い。皆バックグラウンドの知識もしっかり持っているし、中にはすでにNGOなどで実際に働いた経験のある学生や、自分自身途上国の出身で祖国の状況をなんとか変えたいと強い意志を持っている学生も少なくなく、そのような学生達の議論について行くのは本当に大変だったが、刺激的であった。授業についていくのは最初から最後まで困難づくして、もう少し英語ができれば、と自分を責め、今でも悔やまれるが、SOASという優れた大学で、様々な国から集まった学生達と机を並べて開発学やジェンダー学などを勉強できたことは、本当に素晴らしい経験であった。図書館で夜遅くまで他の留学生と励まし合いながら勉強した日々や、寮のキッチンでフラットメイトと一緒に紅茶とクッキーを片手に一緒に勉強した日々は本当にかけがえのない思い出である。

アカデミックな面以外においても様々な出会いや経験をし、非常に充実した一年であった。ロンドンという町は、本当に毎日新しい刺激に満ちていて、勉強に疲れたときにちょっと歩いて散歩だけでも新しい発見があって、飽きることのない街であった。歩いていても少しも飽きないから、どこに行くにも2時間くらいなら徒歩で行き、地下鉄やバスを殆ど使うことが無かったほどである。ロンドンにはSOASのすぐ隣にある大英博物館をはじめ様々な素晴らしい博物館や美術館が数多くあり、毎週末かけて回っても回りきれないほどであった。また、日本にはない週末のマーケットでのアンティークやオーガニックフードの物色や各国料理も楽しみの一つであった。日本では考えられないような手頃な値段で楽しめる本場のコンサートやミュージカルにもよくでかけた。また、人種や文化的背景による異なる地区における「棲み分け」も興味深いものであった。日本ではあまり考えることがないが、社会階級というものが露骨に日常生活にあらわれる。

ロンドンという街の魅力もさることながら、何よりも魅力的だったのは、やはり休暇を利用したヨーロッパ旅行である。ヨーロッパには格安飛行機会社が数多く存在し、イギリス国内を旅行するよりも安く短時間で国外へ出ることができてしまうのである。近い国であれば日帰り旅行をすることも可能である。勉強の合間を利用して、私は一年間で実に12カ国へ旅をした。様々な言語や文化、歴史に触れ、多種多様な人々の生活を垣間見た。ヨーロッパに身を置くことで、私は改めて自分が日本人・アジア人であるというアイデンティティを実感し、日本語や、日本という国について客観的に見ることででき、気付くこともたくさんあった。年齢・人種を問わず、これからも一生付き合っていきたいと思える素晴らしい友人にも多く恵まれた。彼らなしに私の留学を語ることは不可能である。

新しい場所へ行き、新しいことを学び、新しい文化に触れ、新しい人に出会った。その中で私は、大きく視野が広がり、改めて自分自身や家族、日本という国や、自分の将来について新しい視点から、じっくり考え見つけ直すことができた。苦労も多かったし、もっとこうしていれば良かった、ここへ行っておけば良かった、など思い残すことがあるのも事実だが、これが自分の今の力量である、と分かったことも、大きな成果であると思っている。そして、この留学を通して学んだ一番大きなことは、どこへ居てもその環境をどう利用し、舵をどう切るかは自分次第である、ということだ。日本に居ても海外に居てもそれは変わらない。この一年間の留学で得た知識と経験を糧に、新たにスタートを切り、色んなことに挑戦し、精進していきたい。

様々な苦労を乗り越えて「留学して本当に良かった」と思える一年を過ごすことができたのは、たくさんの方々の支えがあったことである。私の人生において大きな意味を持つことになったこの大変貴重な留学の機会を与えて下さった、神戸大学とSOAS、多湖先生、準備から今に至るまで色々お世話して頂いた留学生課の後藤さん、法学部教務の服部さん、両大学の職員の皆様、応援し励ましてくれた友人、全面的に支えてくれた家族に今一度、心から感謝の意を申し上げます。本当に、ありがとうございました。

最後に、もし、今この報告書を読んでいる方が、留学しようかどうか迷っておられるのであれば、是非おそれずに、留学に挑戦していただきたい。お金のことや、単位のこと、留学後の進路のこと、迷いの種はたくさんあると思うが、自分が本当に望むものがあれば、それらの問題は必ず乗り越えられるし、留学を通して新たに発見できるものが必ずある。留学を通して得られる出会いや経験は必ずあなた自信を成長させ、豊かにし、それはまた日本の社会や世界を少しでも make the world a better place to live in するために変えていく種にもなり得るのだから。